小学校低学年児童の齲蝕経験と保護者の歯みがき点検・児童の甘味食品摂取との関連に関する学年別検討

○藤原愛子[1,2]　武田　文[1]　朴峠周子[3]　門間貴史[4]
浅沼　徹[1]　木田春代[1,5]
[1]筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻、[2]静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科、[3]人間総合科学大学人間科学部人間科学科、[4]筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻、[5]天使大学看護栄養学部栄養学科

【目的】齲蝕は多因子性疾患であり、その予防には家庭での保健行動と歯科医療を利用する保健行動の双方が重要になる。

子どもの家庭における保健行動には、甘味食品摂取の抑制や歯みがきに加えて、保護者による歯みがき点検が挙げられるが、これらの要因を同時に取り上げて齲蝕との関連を検討した研究は見られない。そこで今回、歯みがき点検と甘味食品摂取習慣を同時に取り上げて、児童の齲蝕経験との関連を、小学校 1~3 年生の学年ごとに検討した。

【方法】 東海地方の D 小学校 1~3 年生の保護者（287 人）対象の記名自記式質問紙調査と、学校歯科健康診断票を転記する齲蝕経験調査を行った。完全な回答が得られた女性保護者 241 人（1 年生：84 人、2 年生：83 人、3 年生：74 人、有効回答率 84.0%）を分析対象とした。

調査項目は、① 齲蝕経験の有無、② 保護者の歯みがき点検［毎日、1 回/2~3 日、1 回/週、しない］、③ 児童の甘味食品群摂取頻度（甘い菓子類：チョコレート・クッキー・ケーキ・菓子パン・饅頭など、飴類、ジュース類）［殆ど食べない、1 回/2 週以下、1 回/週位、1 回/3 日位、 ほぼ毎日］である。

分析は、1）各変数に関する学年別比較、2）齲蝕経験歯有無を従属変数とし、歯みがき点検と各甘味食品群摂取頻度を独立変数とする多重ロジスティック回帰分析（変数増加法・尤度比）を行った。歯みがき点検は、する群（1 回/週以上）としない群に、甘味食品の摂取頻度は、1 回／週以下群と 1 回／3 日以上群の 2 群に分けた。分析には、SPSS16.0J for windows を用いた。

本研究は、静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認、小学校長と学校歯科医の同意を得た。保護者には、回答をもって同意と見なすことを伝えた。調査用紙の配布・回収は児童を介して行った。

【結果】 1）乳歯および永久歯に齲蝕経験歯がある者の割合は、1 年生が 8.3%、2 年生が 39.8%、3 年生が 55.4%であり、1 年生と 2 年生、1 年生と 3 年生との間で有意差を認めた（p＜.001）。また、齲蝕経験歯のうち、第一大臼歯に齲蝕経験がある者の割合は、順に、1.2%、6.0%、10.8%であった。保護者が歯みがき点検をしている者は、1 年生が 62 人（73.8%）、2 年生が 53 人(63.9%)、3 年生が 42 人(56.8%)で、1 年生と 3 年生との間で有意差を認めた（p＜.05）。 2）3 年生の歯みがき点検に齲蝕経験との関連が認められた（p=.046、OR=2.66）。

【考察】3 年生児童において、保護者の歯みがき点検が齲蝕経験に単独で有意に関連しており、歯みがき点検をしないことが児童の齲蝕リスクであることが示された。一方、各甘味食品群摂取頻度は、全ての学年において、齲蝕経験に対して単独で有意な関連を示さなかった。

小学校児童期は基本的な生活習慣の確立を図りながら、さらに健康課題に対しては自律的に取り組むことができるように支援することが重要であるとされており、歯みがき点検終了の目途は、3 年生頃とされている。本対象では学年進行にしたがって、歯みがき点検をしてもらう児童の割合は減少していた。6 歳頃に萌出する第一大臼歯の齲蝕経験者が 3 年生では 10.8%に増加していたが、歯みがき点検をしてもらう児童ではしてもらわない児童に比べて齲蝕経験歯がない者の割合が高く、3 年生児童の齲蝕抑制には歯みがき点検が有用であると考えられた。

本結果は東海地方 1 小学校の 1~3 年生合計 241 人から得られた結果であり、一般化の上では、今後大標本による検討が必要である。

【結論】1・2 年生児童では、歯みがき点検および各甘味食品の摂取のいずれも齲蝕経験と有意な関連が認められなかったが、3 年生児童では歯みがき点検によって齲蝕が抑制される可能性が示唆された。

E-mail；fujiwara@u-shizuoka-ken.ac.jp